

氏名	石川 薫	
学位	博士（中国言語文化学）	
学位記番号		
学位授与年月日		
審査研究科	外国語学研究科	
論文題目	明治末期から大正末期における中国語教育研究 — 笑話・童話を中心に —	
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授	瀬戸口 律子
	(副査) 大東文化大学教授	寺村 政男
	(副査) 大東文化大学教授	山内 智恵美
	(副査) 大東文化大学教授	門脇 廣文

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究方法、論文の構成と内容

近代日本における中国語教育史の研究は、明治期に集中している。明治末期から大正末期における約15年間は、一般的に支那語時代の「停滞」が指摘されている。その頃の中国語は会話主義による実用一辺倒の会話テキストが中心的な教材として用いられ、実用語学・商業語学が総じて支那語学という扱い

になっていた。本論文は、明治末期から大正末期に、支那笑話と支那童話を用いて編まれたテキストに着目し、当時の中国語教育において主流を占めていた論説と異なる提言を行う。つまり、これまで目に留まらなかった新しい資料から明治末期～大正末期の支那語教育を探求し、従来とは異なる立場から支那語の「停滞」や「実用語学」といった言説の見直しを意図した。このことにより、日本における中国語教育史の中の空白部分を埋めることと同時に中国語教本の中で笑話・童話テキストの位置付けの確立を目指している。

本論文は序論、第一部（第1章～第4章）、第二部（第5章～第6章）、第三部（第7章）、結論から成り、具体的な構成は以下のとおりである。

★目次

序論

1. 問題意識
2. 先行研究
3. 研究の特徴・方法
4. 研究の位置づけ
5. 本研究の構成

第1部 支那語学習笑話テキスト・童話テキスト誕生の背景

第1章 現代社会と笑話や童話等の中国語学習テキスト

1. 現代社会と異文化理解と語学学習
2. 現在手に入る昔話などを用いた中国語学習テキスト
3. 支那語時代の笑話・童話を用いた中国語学習テキスト

第2章 大正期の日本における支那笑話・支那童話による支那語学習テキスト誕生と受容の背景

1. 大正時代の日本社会
2. ツーリズムと「支那趣味」
3. 日本社会における童話の発展
4. 大正末期の日本人による支那童話理解
5. まとめ

第3章 中華民国における童話発展の背景

1. 中華民国の状況
2. 民国における童話の発展

第4章 中国語教育史から見る支那笑話・支那童話テキスト誕生について

1. 北京官話教育
2. 支那語教育機関
3. 支那語学習の代表的テキスト
4. 神谷衡平と教科書革新運動

第2部 笑話・支那童話による支那語テキストの作成

第5章 笑話テキストについて

1. 笑話を用いた支那語学習テキスト
2. 矢野藤助『支那笑話新編』の前史的立場に立つ岡本正文と、その『支那笑話集』
3. 矢野藤助『支那笑話新編』により大成された支那笑話による支那語学習テキスト
4. テキスト作成の材料とその方法

第6章 童話テキストについて

1. 矢野藤助『支那笑話新編』附録童話
2. 矢野藤助編『日支對譯支那童話集』
3. 米田祐太郎著『原文對譯支那童話歌謠研究』
4. 矢野藤助撰『華語童話読本』
5. 矢野藤助、米田祐太郎の童話テキストに見る支那語教育観

第3部 笑話テキスト・童話テキストに見る北京語の特徴

第7章 支那語学習笑話・童話テキストと北京語

1. 「北京語」、「北京官話」について
2. 支那笑話・支那童話に見られる北京語の語法特点
3. 北京官話の特徴を持つ支那笑話・支那童話テキスト

結論

資料篇

引用（参考）文献

序論では問題意識、先行研究、研究の特徴・方法、研究の位置付け、本研究の構成を述べている。

第1部では、支那笑話や支那童話を用いた支那語学習テキストが誕生した背景について考察を行った。

第1章では、現代社会における「異文化理解」をキーワードとして、語学学習に笑話や童話（昔話等を含

む)の導入は、その国や地域の人の思考、習慣、風俗、伝統や文化が反映されている。相手の文化や伝統を知る事につながり、異文化理解といった点から非常に有効な方法であることを指摘した。

第2章では、支那笑話と支那童話を用いた支那語学習テキストが大正末期の一時期に集中して刊行された理由を当時の日本の社会状況から論じた。第一次世界大戦の影響による好景気からの日本社会の発展、ツーリズムの発達、谷崎潤一郎や芥川龍之介などの文学者などの支那趣味、日本における子ども観の変化とそれにとまなう童話の発展から述べた。

第3章では、辛亥革命後の中華民国の社会状況について述べ、テキスト誕生の理由を民国社会の変化から探った。それは中華民国で起こった新文化運動における文学革命と、国語教育の発展、および童話への認識の変化から、民国において急激に童話が発達したことを叙述している。

第4章では、支那語学習支那笑話テキストと支那童話テキストが誕生した背景について中国語教育史の立場から論じた。明治から大正末期までの中国語教育を正確に理解するために、善隣書院と東京外国語学校という2つの教育機関に注目し、さらに、神谷衡平と彼の教科書革新運動について叙述した。

第2部では、支那語学習笑話テキストと童話テキストがどのような材料を用い作成されたかについて論じた。

第5章では、支那語教育において岡本正文を最初に支那笑話を語学学習教材として「発見」した先駆者とし、矢野藤助による『支那笑話新編』の刊行の基礎作りをした人物として位置付けをした。矢野藤助の『支那笑話新編』の出現により、支那語教材として支那笑話が登場する。

これらのテキストには出典がまったく記載されておらず、当時の支那語学者によるテキストの編み方は不明である。そこで、出典調査を実施した結果、岡本と矢野両者はそれぞれの時期の「最新」資料に基づきテキスト作成を行っていたことを探り出した。

第6章では、支那語学習童話テキストが大正末期にまとまって刊行されたことを重視し、この支那語学習童話テキストの出版という社会の動きを中国語教育史の中に適切に位置付けるために、矢野藤助と米田祐太郎両者のテキスト作成方法の一端を明らかにした。彼らは、笑話テキストと同様、中華民国の「最新」資料、つまり中華民国人によって書かれた童話を用いてテキストを編集していた。また、その童話は中華民国の小学生たちが白話文を学習するためにも使用されている。

第3部では、支那笑話・童話を用いた支那語学習テキストが北京語の特徴を有するかについて、太田辰夫による北京語の7つの語法特点に従い分析を行った。

第7章では、戦前の日本の支那語教育は、大正期にはすでに南京官話教育から北京官話教育へと移行している。そこで、支那語学習笑話テキストおよび支那語学習童話テキストが北京語学習テキストとして最適なものであるかの確認作業を行った。その結果、岡本正文の笑話学習テキスト、矢野藤助による各種支那笑話と支那童話のテキスト、および米田祐太郎の童話テキストは北京語学習に適したものであることが明らかになった。

3. 研究の成果及び評価

本論文の成果はおおむね次の4点にまとめられる。

1、これまで取り上げられることがなかった明治末期から大正末期までの期間を研究の範囲として取り組み、笑話・童話が中国語学習テキストとして編まれ、学校教育の場において使用されていたことを明らかにした。2、近代日本の中国語教育史の中で空白状態となっていた部分を、新しい資料の発見により埋めることができた。3、明治期に編まれた数多くの中国語教本と同様に、笑話・童話を扱ったテキストは教育効果が高いことを指摘した。4、資料の発見を精力的に行い、収集した資料と中国の文献を照合し、さらに日本で収集可能な当時の貴重な雑誌等の確認作業を行った。

<審査会における意見>

2016年2月1日、審査が大東文化会館で行われ、各委員の意見整理を瀬戸口律子が行い、副査全員の確認を経たものである。

①内容が豊富すぎて、何を強調しているかがはっきりしない。②中国辛亥革命後の日本においては、中国の著名な作家の文章が中国語テキストとして利用されていた。学校教育の場で岡本正文、矢野藤助らの編んだ中国の笑話・童話のテキストを取り上げたという指摘はこれまでなかった。この点は評価に値する。③笑話・童話テキストは単に語学教育の面だけでなく、その内容から異文化理解につながり、中国の社会・風俗・習慣等も併せて学ぶことができる。④本文にある膨大な引用部分については、資料編としてまとめるのが望ましい。資料編は利用法によっては論文作成が可能となる貴重なものなので、今後の研究が大いに期待できる。

本研究は、本文に採用した笑話・童話テキストの言語については分析に甘さが感じられ、今後の研究課題として残るが、本論157頁、資料編96頁に上る労作である。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上